・・・Like a Cafe

～大空間再生・体育館からデザイン工房へ～

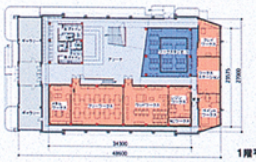
コンバージョン

体育館→デザイン工房へ

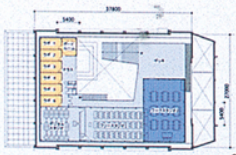
女子短期大学部の大学併合により使用しなくなる予定だった大学施設内の体育館を芸術学部のデザイン工房へと転用した計画である。毎年恒例のユニークな課題である高さ１０Ｍからの卵パッケージ落下衝撃吸収実験のために屋内の高い天井高が求められ、既存の体育館が着目された。

転用工事には、道路や工房等の特殊仕様のため、一般仕様の同規模建物を新築するのと同等のコストがかかったが、健全な構造躯体を保持した大空間を積極的に再利用する大学側の姿勢があった。内部の変容に比べ外観にはほとんど手をいれず体育館然としているが、むしろそのギャップがおもしろい。

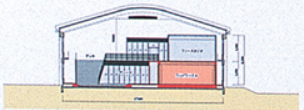
■既存RC　■新設RC



1階平面図



2階平面図



断面図

・・Like a Cafe

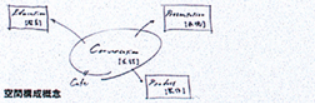
カフェでお茶を楽しみながら会話するように

『ものつくり』について語り合いたい・・・

カフェといってもコーヒーや紅茶を注文できるわけではない。時間を忘れ、仲間、そして先生達と語り合えるカフェのような空間。クリエーターの卵である学生達のために、そんな空間づくりをしたいと考えた。

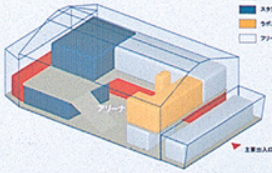
会話からはじまる創造・・・。

会話の中心となるは、既存体育館の大空間を有効活用した中核に配置されたアリーナであり、そのアリーナを取り巻くようにワークスエリア［工房］・スタジオエリア［教室］・ラボエリア［研究室］・フリーエリアを螺旋状に配置している。そのアリーナと個々の室の相互関係により製作・表現・教育が展開される。



空間構成概念

計画初期イメージパース

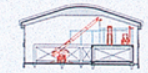


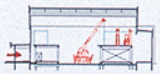
空間構成ブロック

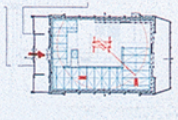
ボトルシップ工法と遮音

構造的に既存体育館躯体に負担をかけないことを前提条件とした。既存部と新設部の構造躯体はそれぞれ独立しており、新設躯体用のＰＨＣ杭を施工しているが、杭打ち機、２階への鉄骨揚重クレーン、建築資材の搬入はすべて既存エントランス開口（間口Ｗ４．８ｍ×Ｈ３．３ｍ）から行っている。そのため、材料、重機のサイズには制限がつけられた。狭い入口から建築資材、クレーン等を搬入し、順序を考え施工を行っていく。さながら空き瓶の中に船の模型を作る方法に類似しているのでボトルシップ工法と名付けている。

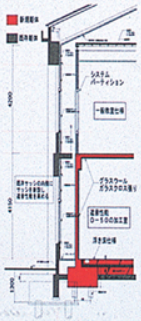
また各種工作機械の発生音測定に基づき、隣地民家との境界で夜間ＮＣ４０値を実現すべく大規模な遮音工事を行った。特に作業音が大きいと予想されるワークスエリア［工房］を１階のＲＣ造の中に、軽作業及びデスクワークをアリーナや２階（鉄骨造）へ配置した。さらに既存体育館のサッシにカバー工法による２重サッシを設け、既存壁ほぼ全面にグラスウールによる吸音壁を施工している。







揚重クレーン施工計画図



断面詳細